

先月、久しぶりに2年目の英語科教員であるSS先生の授業を参観した。7月に参観して以来である。そのときは、「職員室だより『切磋琢磨』」に、その授業の様子を載せた。そこには、下の記述が残っている。

間髪入れずにテンポよく授業が進んでいきました。例えるならば、長距離の集団走でしょうか。それでも生徒は、数分ずつの自力解決、ペア学習、起立しての全員での音読、タブレット、そして振り返りまで、全員の生徒が熱心に取り組んでいました。4月からの積み上げにより、学習訓練ができています。まさしく“鍛える英語教室”です。授業者の話も無駄がなくシャープです。それでいて、語り口はソフトです。

SS先生の授業は、参観するたびに変わっていく。私は、彼が本校に赴任した4月の授業を知っている。あの頃とは、まるで別人である。わずか1年半あまりの間に、自分の授業スタイルをつくり上げ、立ち止まることなく常に改善を加えようとしている。もしかしたら、毎時間、何かしらのチャレンジをしているのかもしれない。

7月の授業を参観した先生方は、テンポが早すぎるのではと感じたはずである。実際、間髪入れずという表現が合うくらい早いのは確かである。しかし、それでも生徒はついていく。長距離の集団走から脱落する生徒はいない。

今回はというと、相変わらず“鍛える英語教室”なのだが、ややスローになっていた。7月よりも授業者に余裕が感じられた。程よいテンポである。7月に参観したときは、このままのペースではいけないだろう。きっと早すぎることに気づいて、ペースを落とすはずだと思った。予想通りになっていた。

今回の10月の授業は、“生徒を休ませない授業”である。生徒は忙しい。生徒は、ずっと考えながら話したり書いたりしている。脳みそが疲れる授業である。このくらいでよい。生徒は授業の最初から最後まで集中していた。授業の良し悪しは、生徒が教えてくれる。

7月もそうだが、今回も自分の授業をビデオに撮っていた。この姿勢がよい。黒板には、課題とまとめのマグネットシートそしてタイマーの3つしかない。不要な掲示物がない。黒板の端から端まで教科の授業で使うことができる。余計なものがないので、生徒も集中できる。また、ICTも実にスマートに使いこなしている。

SS先生には、経験がない。かえってそれがいいのかもしれない。いや、それだけではない。彼は勉強をしている。学習指導案には、思考ツール、ウェビングマップ、FonFの手法などが出てくる。学習指導案を見ても授業を見ても、勉強に裏打ちされたものだということが感じられる。

鍛える英語教室、続・鍛える英語教室ときた。次は、どんな授業だろうか。楽しみである。